秋

あきあきしてる？

なつにあきれば
あきがくる
あきのこないあじが
あきにくる

あきいろもみじの
おろしをそえて
さっぱりさんみの
ぽんずをかけて
さぁさこよいは
さんまをたべよう
やっぱりさんまは
めぐろにかぎる

二夜

コンビニ

腹が減った。

腹が減るなんて生っちょろいものではない。飢えだ。いや言葉の微妙なニュアンスなどどうでもいい。ともかく激しい空腹感が俺を襲った。まるで天高くから降ってきたかのように唐突に。朝食を抜いたせいかもしれない。買い置きの食パンをつかみ、封も開けるのももどかしく囓りつく。

モグモグ　ハムハム　ゴックン

食パン一斤を平らげたが、こんなものではまだまだ足りない。家を飛び出し近くのコンビニに駆け込んで、棚の弁当を片っ端からむさぼり食う。止めに来た店員をなぎ倒し、容器を次々に空にしていく。会計なら後でする。今はそんな事をしている余裕は無いのだ。

ムシャムシャ　パクパク　ポリポリ

弁当類を食い尽くし、菓子類のコーナーへと移る。食べても食べても腹の虫は黙るどころかますますうるさく泣きわめく。大袋のポテチを開け、水を飲むように流し込む。

ブチン。腰のベルトが弾け飛ぶ。次にTシャツが破れ、ジーンズに裂け目が入る。全身が脂肪で膨らんでいる。靴紐はとうの昔に千切れ、それでもなお靴が足を締め付けてくる。

だが構うものか。俺は、今、腹が減っているんだ。

バクバク　ガリガリ　クチャクチャ　ボキボキ

ガツガツ　モギュモギュ　ベロベロ　ゴキュゴキュ

俺の体はどんどん膨れ、巨大な肉の塊に、少なくとも人間では無い何かに変わっていく。イモムシ状の肉塊は大きな口でホットスナックのケースを噛み砕き、3メートルほど離れた腹の辺りから串だけを放り出す。包み紙や赤い制服をまき散らしながら店内の食べ物を食い尽くしたイモムシは、次なる餌を求めてガラス壁を突き破り店外へと這い出ていく。

〔国語〕

第3問　次の文章は、尽々法師の作品『後れ蝉』の一節である。民々の宮は、以前山里へ出かけた際に見かけた、日暮しの姫君に恋をしていた。山里から帰っても姫君への思いは消えず、何度も歌を添えた手紙を贈ったが、返事が来ることはなかった。次の文章は、会いたさに耐えかねた民々の宮が、姫君を訪ねてきた場面である。なお、これを苦労して読んでも後の問いなどは用意されていない。（配点０）

九月の晦日、日も暮れ来て、やうやう姫君が家に着きぬ。「何処にかおはする」と呼べども、答へなし。思ひつく限りの方をとぶらひしが、え見付けず。うしろめたくも、呆れいたすほどに、庭の方より女の泣く声の聞こゆれば、行きてみるに、三十ばかりなる女のわびしげなるが、大きなる木の根元に泣き居たれば、「いかで泣きつる」と問ふ。女、おどろきて、「われは日暮しの姫君が乳母なり。されば、なんぢは誰そ。まづ答へよ」と言ふに、宮、「われ、姫君を思ひつるものなり」とて、一目見しより日ごろ思ひつること、幾度も文をやりつることなどこまやかにことわりぬ。女、「なんぢ、うらなしと見ゆれば、わが泣きつる由を語らむ」とて、「姫君は、九月一日にわづらひ給ひて、九月七日にいたづらになり給ひき。年ごろかしづき奉れば、ただ忍ばれざりて泣きつるのみ」となむ。

宮、ゆくりなく、あさましきことにいと悲しうて、ただつくづくと流れ出づる涙のえとどめざれば、「いかでかこの涙をとどめむ」とて、空を仰ぐ。いつしか日も落ちて、立てる木に、小さき蝉一匹、月の影に鳴きたるを見て詠める、

夏過ぎて独り月夜に鳴く蝉の相手も居らでおくる恋歌

（注）　おくる恋歌―「贈る」と「後る」の掛詞。

秋夜

名月十五夜を照らし

名月照十五夜

鈴虫奏で寂静を破る。

鈴虫奏破寂静

秋空いたずらに沙雨を垂らしめ

秋空徒垂沙雨

釣瓶落としつ宵を迎える。

落釣瓶而迎宵

秋の終りに

秋晴れの空の下、その侍は仇討ちの旅をしていた。彼の父は、信頼していた下男に裏切られ、殺された。父を殺した男は逃げ、侍はそれ以来仇討ちの旅をしている。

万に一度も討ち損じは許されぬと、侍は剣術の修行も怠らなかった。

侍の頭上を、数羽の燕が飛び行く。越冬のため、南に向かっているようだった。白刃煌めき、刀身が鞘に収まった時、雌の燕が空を落ちた。空中での方向転換の巧みな燕を斬ることは、至難の技とされる。侍は結果に満足し、先を行く。

道中、旅籠で足を休める。仇の行方を尋ねることは忘れない。たいてい、情報は手に入らない。しかし、旅を続けて知り合った者たちの中には、積極的に情報を集め、知らせてくれる者もいる。今も、そうした情報をもとに行く先を決めていた。

それから数日後、都にいる知人から仇の情報が知らされてきた。仇の男が都に行商に来ているとの事だ。侍は都へと向かう。

その日は珍しく、昼間から旅籠で身を休めた。前日までの秋晴れが嘘のように、今日は朝から雨が降り、早々に休むことにしたのだった。考えてみれば、旅を始めてから、かなりの月日が経ち、心身ともに疲れ切っていた。そこへ、風向きによってか、侍のいる部屋に微かな話し声が聞こえてきた。それは男の声だった。

「…あいつを殺しても、何もなりはしない。おとなしく俺たちと一緒に…」

「返り討ちに遭うことだって…。それに早く…」女の声。

最後は少年の声だった。「でも、ぼくはあいつがこの空の下に生きていることが我慢ならない。ぼくはいいから、兄ちゃんと姉ちゃんは先…」

風向きが変わったのか、声は途絶えた。少年も、仇を討とうとしているようだ。侍は空を眺める。雨は止み、雲の切れ間から澄み切った秋空が垣間見える。侍も、仇を許すことは出来ない。広がりゆく晴れ間の下、二羽の燕が空を駆けていった。

翌日、仇討ちへの思いを胸に侍は足を進め、数日後には都へたどり着いた。そしてついに、人混みの中、忘れたことのない仇の姿を見つける。人混みの中、一歩一歩近付いて行く。そして、確実に仕留められる、という距離に至る。仇は気付かない。侍は声を絞る。

「―母の仇、覚悟―」侍の耳に、その一言が響いた。聞き覚えのある、幼さの残る声だった。

侍の声は、喉に突き立てられた短刀に吸い込まれていた。その柄を握りしめる、見知らぬ少年の小さな手。侍は苦しげに呻き、息絶える。胸の内で紡がれた言葉は喉元で断たれ、ついに発せられることはなかった。

少年は人混みに紛れ、その場を立ち去る。悲しそうな微笑みを浮かべて空を見上げ、息を漏らす。「―仇は討ったよ、お母さん」

その言葉を残して少年の姿は消えた。後には小さな燕が、兄姉を追って南の空へと飛び去って行く。北風が、小さな命を揺らす。

それはこの年初めての木枯らしだった。秋は終わり、冬が来ようとしていた。

「こんばんは」
「あら、こんばんは」

「もう秋でしたか」
「とっくに秋よ、お月さま」

「それ、素敵な色ですねえ」
「むらさきは、あなたの光の色ね」

「今年の秋はどうですか」
「最高よ。だって、今年の秋しか知らないから」

「そうです、いつも思うのです。あなた方の命は、短いと」
「そうね。もしかしたら、あなたの瞬きよりも」

「それでも、否、だからこそ、あなたは綺麗だ」
「ふふ、いいえ。秋だから、ということにしておきましょう」

「秋だから、ですか」
「そうよ。秋だから何もかもが美しいの」

「私はどうです。何億回目かの秋でも、私はまだ綺麗ですか」
「ええ、とても。輝いているわ」

「なら、また来年の秋までは、ここに浮かんでいることにします」
「あらあら、何を言うの。それが秩序でしょう」

「これでも寂しいのです」
「来年も、誰かがあなたを綺麗と言うわ」

「そうでしょうか」
「あなたが輝く限りは、きっと。……時間だわ。さよなら、綺麗なお月さま」

「……ええ、どうもありがとう。何億本目かの、優しいコスモス」

月とコスモス

もみじ狩り

もみじ狩りに誘われた僕は電車で数十分の紅葉の綺麗な山に来ていた訳ですが・・・

「揃ったな。それでは作戦内容を説明する」

なぜか軍事キャンプに迷い込んだ気がしてならないのです。誘ってくれた猿丸君は秋の山に対応するためなのかどうか知りませんが赤みがかった迷彩服に黒光りするアサルトライフル、背面には刃渡り五十センチもあるククリナイフを装備しています。とりあえずアサルトライフルがおもちゃだとしてもククリナイフが確実に銃刀法違反です。ですがそれは瑣末なことで、重要なことはあこがれの女の子、菅原さんも同じ格好をしているということです。ただし彼女はククリナイフの代わりに軍用のナタを持っていますが。ちなみに残り一人の橘君はアサルトライフルの代わりにスナイパーライフルを持っています。

「今回の作戦内容はもみじ狩りだ。俺はポイント・アルファから西を、菅原はポイント・ブラボーから南東を、京極はポイント・チャーリーから北東を担当、橘はこのポイント・デルタから状況の報告と京極のバックアップを頼む。京極は初陣だ、ちゃんとやることを指示してやれ。以上だ。各員持ち場にて待機、約三十分後の一一〇〇より状況を開始する。京極、装備を貸してやるからついてこい」

猿丸君がミリオタだということは分かっていましたがまさかここまでとは思いませんでしたよ。ハハハ。ちなみに猿丸君からは「お前はとりあえずはいるだけでいい」とのことでした。もう訳がわかりません。とりあえず猿丸君と同じ装備を貸してもらいました。ライフルとナイフの重さが妙にリアルです。

「これより状況を開始する」

貰った通信機から猿丸君の声がします。とりあえずさっきの指示通りに北東方面に向かうことにします。

「京極、二時の方向に目標発見。追い込め」

知るかよとツッコミたいのですが、とりあえず指示に従います。

「こちら菅原、五時の方向に目標発見、攻撃を開始する。ケツに鉛玉ぶちこんでやるぜ！」

あこがれの菅原さんがすごくかっこいいです。でも僕はドン引きです。好きな子のこんなセリフは聞きたくありませんでした。清楚で可憐なイメージが崩れていきます。

「京極！真正面にいるぞ！」

見ると巨大な鹿がいました。全長２ｍぐらいの。いや、僕に何をしろと。

「撃つんだ！京極！」

無理言わんで下さい。一応銃を構えて引き金を引こうとするも安全装置のせいで引けません。解除方法がわかりません。つまり、僕ピンチです。滅茶苦茶怖いです。なんか走馬灯が見えてきました。

ダン！と大きな銃声を皮切りに連続的な銃声が飛び交います。僕が恐怖で立ち尽くしていると鹿が倒れました。

「こちら菅原、目標を射殺」

「こちら橘、作戦区域内に残存目標なし」

「了解。現時刻を持って状況を終了。よくやった。今日はもみじ鍋だ！」

どうやら終わったようです。とりあえず猿丸君、もみじ鍋の具は鹿肉だけど、鹿狩りはもみじ狩りとは言わないよ。

「奥山に　紅葉ふみわけ　鳴く鹿の
　声きく時ぞ　秋はかなしき」

うっさいわ！それがもみじ鍋の元ネタなのは知ってるよ！だからどうしたんだよ！

とりあえずその後みんなでもみじ鍋を食べました。おいしかったけど、何かいろいろなくしてしまった気がした高校二年の秋でした。

心

うだるような夏の暑さもどこかへ去っていってしまい
うれしさと共に寂しくもある
周りの静寂の中に外の雨の音だけが聞こえてくる
今日は少し肌寒い
これからあの寒さがやってくるよと
いたずらっぽい表情をして私の体に語りかけてくる
「残念でした。今の私にはあのくらいの寒さは心地いいのよ。」
ちょっと強がってそんなことを思ってみる
期待はずれな顔をして君もどこかへいってしまった
片耳につけたイヤホンからはまだ早いクリスマスソングが流れてくる
今年のクリスマスはひとりぼっちかな
携帯を見てみるとあの人からのメールが届いている
この人は私をずっと好きでいてくれるだろうか

九夜

十月三十一日、日付も変わろうとする深夜二十三時四十分。前触れもなしに玄関のチャイムが鳴った。こんな非常識な時間にだれだろう。明日締め切りのレポートに追われていた俺は、少しイライラしながら玄関を開けた。そこには、俺の半分くらいの身長のかぼちゃ頭の黒マントが立っていた。

Trick or treat!

やたら素晴らしい発音で決まり文句を言うと、かぼちゃ頭は当然のように両手を差し出した。いや、まぁ、確かに今日はハロウィンだ。うちの近所ではこの日、様々な化物に扮装した子供たちが、お菓子をもらいにあちこちの家へと押し掛けることが許されていた。うちにも何人かの可愛らしい化物の訪問があったし、俺も別に子供が嫌いではなかったので、ある程度のお菓子を用意して、小さな怪物にあげた。しかしそれは、夕暮れ時の訪問の話である。

「君、今何時だかわかってる?もう真夜中だよ?

てか、お母さんはこんな時間に君が外出るの、怒らなかったの?」

予想外の反応だったのだろう。かぼちゃ頭はその重そうな頭を少しかしげて、そしてもう一度ネイティブさながらの発音で決まり文句を言った。お菓子をあげようにも、もう全てあげてしまったし、そもそもこんな遅くの訪問自体、悪質ないたずらみたいなもんじゃないか。

「お菓子はもう他の子にあげちゃってないんだよ。」

そう言っても動く気配はない。どうやって帰そうかと、かぼちゃに開けられた真っ暗な穴を見ながら考える。それにしても良くできたかぼちゃ頭だ。重くないんだろうか。なんとなくかぼちゃ頭を見ていると、かぼちゃ頭は急に「OK.」などと言って振り返り、歩き出した。お菓子はもらえないと諦めたんだろうか。

ぼーっとその後ろ姿を眺めていると、道の途中で立ち止まって、こちらを振り返った。先ほどよりもくりぬかれた口が大きくなっているような…などと思っていると、真っ暗だったかぼちゃ頭の中に小さな明かりが灯り、そして、

「あれ、消えた。」

街頭に照らされた道路には、もう人の姿はおろか、猫一匹見当たらなかった。うーん、寝ぼけていたんだろうか。確かにウトウトし始めてはいたし。と、そこで急にレポートの事を思い出した。さっさと仕上げなければ。部屋に引き返し、8割ほど完成したレポートへと向かう。ペンをとって書き始めようとしたとき、後頭部でクシャッと音がした。振り返ったが、後ろにあるのは壁である。何だろう、と頭に手を伸ばすと、ぬめっとしたものに手が触れた。びっくりして引いた手には、透明と黄色の液体が付いていた。これは…卵?などと思う間もなく、今度は机で続けてクシャッ、クシャッ、クシャッと音がした。振り返ると、完成間近のレポートが生卵まみれになっていた。

十月三十一日、深夜二十三時五十九分。狼男顔負けの、俺の悲痛な叫び声が近所に響き渡る中、かぼちゃ頭の笑い声がどこかでこだましていた。

月見

十五夜に
想いを馳せるは
千年後
月に住むは
兎か人類(ヒト)か？

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	あきあきしてる？	6 pt	5 位	0 sp
		安くておいしい定食屋さんの壁に貼ってありそうな。リズムの良さ、そしてフォントと中味がしっかりマッチしてて、ほんとにおいしそう♪な今週の表紙でした。		
02	コンビニ	3 pt	8 位	2 sp
		むむ？ 千と千尋か? 豚ならぬイモムシ登場。 妄想パワーナイス。さてこのイモムシ君、街へと這い出してどう決着がつくのか。そのあたりまで射程に入ってくると、もっと爽快な仕上がりになりそうですが。 特別賞：ギャル曽根で賞（はらペコ青虫ですね） やせま賞（太ったから）		
03	国語 第３問	13 pt	1 位	3 sp
		これは、すてきな知的たくらみ。 夏が過ぎれば蝉はいなくなる。入試をくぐれば、おあつらえの「問い」なんかないのさ。ちょっと哲学的な読みまで入れてみたくなります。 それにしても、読まなくていいよと読み手を誘う。まさにツンデレの極意！ あざやかでした。 ゴールドメダルのほかに、最多特別賞＆イチオシフレーズ大賞タイといきなりの三冠達成でございます、おめでとう!!! 特別賞：八対二で賞（ツンデレの黄金率） ヨーゼフ・ツンデレ型双極性パーソナリティ障害で賞（落とし方がすばらしい!!） 古文は苦手で賞？（よみがえる悪夢） イチオシフレーズ：「第２回ツン台・デレッセマーク模試」×３ 「配点０」		
04	秋夜	0 pt	10 位	0 sp
		これまたワザアリの逸品。風流だなあ、気合い入ってるなあ。 お寺の壁なんかにしっくり似合いそうです。効果音、ごぉぉぉん。		
05	秋の終りに	4 pt	6 位	1 sp
		因果はめぐる。仇もめぐる。なんとツバメ君の敵討ちとは、これぞツバメ返し!? 「北風が、小さな命を揺らす」など、細部のフレーズのていねいさがドラマを盛り立てています。 特別賞：鬼頭莫宏賞（この人のマンガの読み切りに似てるから）		
06	月とコスモス	11 pt	2 位	1 sp
		コスモスって、そういえば「宇宙」ですよね。 そんな連想をゆったりと響かせながらのエレガントな問答。「何億本目」というフレーズの広がりに、TA一同めろめろでございましたわ。		

		まるではかったように銀色の光に包まれましたね。おめでとうシルバーメダル!! 特別賞：それが秩序で賞（文体がキレイ） イチオシフレーズ：「何億本目かの優しいコスモス」		
07	もみじ狩り	10 pt	3 位	2 sp
		ミリオタ全開。ありえない「状況」での紅葉狩りが痛快爽快、ライトな気分で突っ走れます。 はてさて、こんなふうに始まってしまった京極くんと菅原さんの今後やいかに？ おめでとうブロンズメダル＆イチオシフレーズ大賞タイ!! 特別賞：ドン引きで賞（菅原さんの言葉が...） 鹿を大切にしま賞（鹿が可哀想だから） イチオシフレーズ：「ケツに鉛玉ぶちこんでやるぜ！」×３ 「無理言わんで下さい。」		
08	心	1 pt	9 位	0 sp
		ひとつの恋をゆっくりと送って、次へ。そんな乙女心の衣替えヴァージョンだったでしょうか。 「片耳につけたイヤホン」が、いい小道具使いです。 タイトルやレイアウトを凝ると、もっと映えるのに、もったいない。		
09	Trick or treat!	4 pt	6 位	0 sp
		真夜中の訪問者。リアルに造型されていて、恐さ倍増、ほとんど都市伝説。 かぼちゃ頭の消えるシーンとか、描写うまいなあ！ 作者さんのお許しもいただけたことですし、レポート遅延の言い訳にどうぞ。		
10	月見	8 pt	4 位	1 sp
		夜空を見上げれば想いは時のかなたに。 人類の未来へと想いを馳せた気宇壮大さとシンプルさが、お月さま登場しまくりの秋セッションの、とてもいい裏表紙になりました。 特別賞：永夜賞（月にはたくさんの人がいた。そこには兎もいた。蓬莱の策を使い、追放された民が帰るのに千年もかかるまい） イチオシフレーズ：「兎か人類（ヒト）か？」		